

---

# フェルダムト！EP.00 G.O.M 1 紅瞳の天使と黒髪少女

羽沢 将吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

フェルダムト！EP・00 G・O・M 1 紅瞳の天使と黒髪の少女

### 【Nコード】

N7650C

### 【作者名】

羽沢 将吾

### 【あらすじ】

「フェルダムト！」ドイツ語で「くそつたれ」の意味を持つ台詞…世界を駆けずり回る最強のジャパニーズ・サラリーマンのガードマン稼業時代のエピソード、ここに公開！

「はじめまして、あの、なんてお呼びすれば良いでしょうか？」

俺の目の前に、クライアント雇用主の愛娘である少女が現れた。

ブラチナフロント長い銀髪と真紅の瞳を持つその少女は

今まで逢って来たどんな美女よりも美しく、俺は一目で少女に参ってしまった。

「はじめまして、お嬢様。貴女のお好きな様にお呼び下さい」

「…では、熊小父様アングルベアとお呼びしても宜しいですか？」

貴方は、大きくて優しい熊さんみたいだから！」

悪戯っぽく微笑む少女。その愛らしさにぶっ倒れそうだ。

「ご随意に。我が姫君。俺は今この時より貴女を命に替えても御護ります」

少女はおずおずと右手を差し出す。俺は跪き、少女の手の甲にキスをした。

白磁の様な頬を染める少女。そして俺は、少女の守護者ガードマンとなった。

「ベア、モンキー、お願いが有るの…」

瞳に涙を溜めた少女が俺達の元を訪れた。

彼女の後ろに彼女付きのメイド、セラが困ったような表情で立っている。

俺がお嬢様のガードとなつて三年が経つ。

歳を重ねるごとに美しくなつて行く少女は現在十五歳となり、

可憐な少女の香りに艶やかな大人の匂いを加えつつ有り、

満開寸前の白薔薇の様な趣を湛えている。

彼女は美しいだけではない。聖母の様に優しく、慈悲深く、

そして誰にでも、どんな時にも笑顔を絶やさずに向ける。

彼女の微笑みは俺達の誇りであり、それを消す者は何人たりとも赦せない。

その彼女が涙を流している。俺と相棒はガタ、と立ち上がった。

「お嬢様、どうなさいました？何でも言っして下さい！この俺に！」  
モンキーが吼える。調子の良いヤツだが頼りになる相棒だ。

「…あのね、助けて欲しい女の子が居るの」

俺はそれが誰だかピン、と来た。

お嬢様は現在、とある名門女子校に通っている。

通学途中、余り治安の良くない地区も通るので送り迎えの車には俺が相棒が必ず同乗する。

その治安の良くない地区を通る時、お嬢様は一生懸命窓の外を凝視し、

何かを探し、見付けると輝くような微笑を見せ、見付けられないと寂しそうに俯く。

お嬢様の視線を独り占めするその相手は、黒目黒髪の少女だった。

その少女は小さな子供達を集めて遊んでやっていたり、犬猫の中心で戯れていたりと、

時には近所の子を預かりでもしたのか、赤ん坊を背負っている事も有る。

お嬢様の彼女を見る視線は、おそらく憧れだろう。

裕福な家に縛られている自分に無いものを彼女に感じている。

また、いつも子供や動物に慕われている少女に深い優しさを感じているのだろう。

お嬢様が本当に信頼できるのは、今の屋敷の使用人と、後は父親だけであるから…。

そして、意を決したお嬢様は今日の学校からの帰り道、少女に声を掛ける為に車を止めさせた。

しかし、少女はお嬢様が車から降りる寸前に数人の少年に囲まれ車に乗せられ、連れて行かれた。

「女の子？ご友人ですか？」モンキーが聞く。

お嬢様は首を振り、

「今は違うの。でも、お友達になつて欲しい娘なの…」

ルビーの瞳から、ダイヤモンドの涙が零れ落ちる。

「…今日、声を掛けようとしていたあの少女ですね？」

俺がお嬢様に問い掛けると、こくん、と頷いた。

「お嬢様、いけません。あの様な娘に関わつては。ご主人様<sup>マスター</sup>に叱られますよ」

セラがおろおろと説得する。おそらく、かなり前から説得し続けているのだろう、

お嬢様は諦めきれずに俺達の所へ来てしまったのだろう。

「ベア、モンキー、貴方達からもお嬢様に何か仰ってください」

セラが俺達に懇願する。セラに惚れているモンキーは困ったように黙り込み、座った。

「お嬢様、俺はあの少女の事を少し調べておきました。

彼女は現在、ある不良グループのリーダー<sup>おんな</sup>の情婦です。

また、恐らく今日少女を連れ去つたのは対立しているグループの連中です。

あの少女はお嬢様の思われている様な普通の少女では有りません  
セラが真つ青になる。

「ベア！そんな事をお嬢様に言わなくても…！」

俺は構わず続ける。

「お嬢様、貴女の彼女に対するお気持ちは、捨てられている野良猫を助ける程度ですか？」

もしその程度ならお止めなさい。それでは彼女をもつと傷付けるだけです」

お嬢様はしっかりと俺の目を見詰めながら答えた。

「いいえ、私には解るの。あの娘はとても優しく強い娘。

そして、本当の悲しさと辛さを知って、それでも優しさを捨てない娘。

だから、私は彼女と友達になりたい。彼女に預けたい…」

俺は頷き、立ち上がる。

「さて、相棒！仕事だ。行くぞ」

相棒もやれやれ、といった風情で立ち上がる。

「俺達にはちよつと理解し難いが、お嬢様と同じ

ヤボーネ

日本人の血が流れているお前にははつきり理解できたようだな」

「ベア！モンキー！」セラが声を上げる。

「すまん、セラ。RRくまを廻してくれ」

俺がセラに言くと、セラも諦めたように溜息を付いた。

「悪いな、セラ。キミの頼みは天使のお願いだが、お嬢様の頼みは女神のお願いなんだ」

モンキーがヘタなフォローを入れる。

「…解りました。手配します」

「ありがとう！ベア、モンキー、大好き！！」

お嬢様が俺に抱き付き、頬にキスをしてくれる。

「あつ！良いな」羨ましそうに声を上げるモンキーにもキスをするお嬢様。

「セラにもね！」セラもキスをされ、思わずにやけている。

「さて、ご褒美を前払いしてもらったんだ。気合入れて行くぜ！」

五分後、俺達は車に乗り込み、俺が調べておいた不良グループのアジトである

町外れの教会の廃墟に向かって出発した。

その教会は荒れ果てており、屋根の上の十字架は既に落ちてしまっている。

廻りは草原であり、姿を隠すような所は無い。

しかし教会の前には見張りは居らず、元駐車場だった荒地の端に<sup>ロックス</sup>RRを停めても誰も気付かないようだ。

「お嬢様、待っていて下さいね！あつという間に片付けて来ますから」

調子良く言うモンキー。だが、コイツは仕事上で嘘をついた事は無い。

「セラ、お嬢様を頼む。二十分も有れば戻る」

「はい」

平然と答えるセラ。

ブラウンの瞳を持つ彼女に掛かれば、不良の四・五人など物の数では無い。

「さて、行こうか相棒」

「オーケー相棒」

俺達はRRを降りると、満月を背にして教会へと足を進めた。

教会のドアを開けると、生臭い匂いがぷんと鼻を突き、

下半身を丸出しにした不良少年<sup>バカガキ</sup>どもの嬌声が聞えてきた。

中は薄暗く、壁に吊るされた幾つかの懐中電灯だけが明かりの源だ。ざっと見渡した所、人数は四十から五十くらいか。

殆どが少年だが、中には女の子も数人居て、あちこちで数人掛かりで犯されている。

しかしその娘達はほとんどが仲間の様で、嫌がりもせずに受け入れている。

「ベア、どの娘がお嬢様のお気に入りだ？」

モンキーが俺に聞くと同時に、俺は目的の黒い髪を見出した。  
奥の一段高くなっているステージの上、本来ならば牧師が神父が  
礼拝者にありがたい講話を聞かせる為の場所で  
虚ろな表情になった少女が数人の男に嬲られている。  
彼女の虚ろな視線の先には、砕けた十字架が有った。  
俺の中にふつつと怒りが沸いて来る。

「お前ら、いい加減にしとけよ」

俺は静かに怒りの声を上げた。

ピタ、とガキ共の動きが停止した。

男に申し掛かられたままの黒髪の少女がゆっくりとこちらに顔を向ける。

「酷いな、こりゃ・・・」

少女に気付いたモンキーが呆れたように漏らす。

しかし、言葉の印象とは裏腹にそうとう頭に来ている様だ。

イタリアン

伊達男らしく、女性に優しい相棒としてはこの状況は許せないのだろつ。

「なんだお前ら！」「殺されてえのか！」

「・・・不良同士クズの喧嘩なんか別にほつとけば良いんだが、

お嬢様にその娘を助けてくれと泣かれちゃなあ・・・」

溢れてくる怒気をごまかす為か、冷静さを装ってばやくモンキー。

コイツもホントは正義感の強い熱い男だ。

「ゴネるなよ相棒。お嬢様のお願いだ。」

神を殺してくれと言われても俺は従うぜ」

俺の発した言葉に頷き、

「ま、そついう事だな」

と不適に笑うモンキー。

不良共が手に得物を持って奇声を上げながら殺到してくる。

「時に相棒、お嬢様のキスを金に換算したら幾ら位の報酬になると思つ？」



バカな事を聞いてくるモンキーに呆れた俺が

「金で買えるかよ、バカ。プライスレスだ」と答えた瞬間、  
モンキーが一人目のガキの顔面をを裏拳で弾き飛ばした。

「まあそうなんだがな。例えばだよ。値段を付けるならいくら位だ  
と思う？」

俺も飛び掛ってきたガキのナイフをかわしつつ手をひねり上げて体  
を持ち上げ、

二三人固まっている所に叩きつける。

奇妙な悲鳴を上げながらぶっ倒れて動かなくなるガキを踏み付けな  
がら、

「そうだな、百万ドルくらいじゃないのか？」

百万ドルの夜景と同等以上の価値は有るぜ」

と答える。相棒は頷いて、

「じゃあ今夜の報酬は百万ドル以上ってことか。値段分の仕事をし  
ねえとな」

と言いながら回し蹴り二回転で数人のガキを吹き飛ばす。

「さ、黙って仕事仕事。沈黙は金だ」

「あいよ」

俺とモンキーが仕事モードに切り替わる。

俺達は残りの不良共を片付けに掛かる為、気合を入れ直した。

十分後、ガキ共を全て片付けた俺達は黒髪の少女に脇にしゃがみ込  
んだ。

「気合い入れ直す必要も無かったな。

うあ：マジで酷えな。どうする、この状態でお嬢様の所に連れて  
行くのか？」

モンキーが顔を顰めつつ聞いてくる。

確かに酷い。顔こそそんなに殴られていないものの、

豊かなバストは酷く掴まれたらしく真っ青なアザに覆われている。

腹や尻も所々アザが出来ており、右足脛と右手首は骨折している様で

あらぬ方向に曲がっている。そして、何よりも女の大切な所と肛門から酷く出血している。

俺は自分のジャケットを脱ぎ、彼女に羽織わせると、軽い体を抱き上げた。

片隅で固まり、震えている娘達に

「もう一度同じ事をしたら、今度は皆殺しにするとっておけ、良いな」

と凄むと、娘達はカクカクと機械的に頷いた。

「う…ん…、あんた達、誰なの…？」

黒髪の少女が聞いてくる。中々の美形だ。おまけにいい肉体おっぽいしてやる。

…なんか、日本人っぽいがハーフかクォーターか？

「解った…死神…でしょ…？真つ黒だもん…」

「良いから喋るな。俺達は女神様の使いだ」

「…え…？」

俺とモンキーがRRに辿り着くと、セラが外で待っていた。

「お疲れ様でした。」

…まあなんて酷い…濡れタオルを持ってきているからちよつと待つてね」

さすがナチュラルメイド、やる事に隙が無いな。

「ベア、モンキー、お疲れ様でした。ありがとう！

ね、早く車に入れてあげて」

お嬢様が窓から顔を出して懇願する。

俺達は少女をリアシートに寝かせた。

「大丈夫？」

お嬢様が少女の顔を拭いて上げながら真紅の瞳で覗き込む。

「…あんたは、天使様？あたしを迎えに来たの…？」

少女はお嬢様を見て驚いた様な声を上げつつ、気を失った。

「なあ、相棒。やっぱ天使様に見えたらしいぞ」

モンキーが感心したように言う。

「ああ、当然だろ。俺だったら嬉しくて死んじゃうぜ」

掛け合っている俺達を呆れたように見ていたセラが、

「ほら、帰りますよ。地獄から天国へね」

とつまらない冗談を言ったのには驚いたが。

一人の天使とその下僕と、天使に助けられた子羊を乗せたRRは天国へと帰るために闇の中へ滑り込んだ。

屋敷に戻り、娘を医務室に運ぶ前に浴室へ連れて行く。

メイドを数人呼んで娘の体を洗わせ様としたが、

「大丈夫、私とセラでやります」

と言うお嬢様が一生懸命少女を洗い、

綺麗になった少女をバスタオルに包んで運び

医務室のベッドへ寝かせた。

屋敷付きの女医が丁寧に診察している間、

俺は廊下のソファに腰掛けてエスプレッソを三杯飲み干した。

時間は午前三時、モンキーは仮眠室へと消えた。

「診察と手当ては終わりましたので、私は仮眠します」

診察を終え、医務室から出てきた女医に会釈をしてから

入れ替わりに医務室へと入ると、

お嬢様が少女の左手を握り締めながら座っている。

改めて少女の顔を見ると、綺麗な顔立ちをしている。

あんなガキ共にやあ勿体無えな。

それにしても、本当に日本人っぽい顔立ちだよな。

「ベア、本当にありがとう。」

女医のお話では、あのまま放置されてたら

命が危なかったかもしれないって……」

お嬢様の瞳からキラキラと宝石が零れ落ちる。

あれを固形化して売ったら、きっと大金持ちになれるなど  
バカな事を考えてから思わず苦笑する。

「それは良かった。しかしお嬢様、この少女をこれからどうするの  
ですか？」

俺は懸念していた事を聞いてみる。

「……私のお友達になってもらうの。」

それで、この娘がもし承知してくれたら、家で引き取って一緒に暮らしたいと思ってるわ。もちろん、お父様をお願いしてね」

なぜ、この娘にそんなに拘るのか？

俺の表情を見て、まるで心を読んだかのようにお嬢様は話し出した。

「私はいつも、この娘の事を追っていました。

彼女はとても優しく、そして強い娘です。

いつも彼女の周りには子供や動物が集まってきていました。

それに、彼女はご老人や妊婦さんにとっても優しく接していたの。

彼女はきつとご両親やご家族が居ないのでしょう。

彼女は弱き者達に限りない優しさを向ける事が出来て、

そして本当の哀しさと辛さと涙を知っているから

弱い人達は彼女の前で心を開く…

貴方やモンキーは私の事を天使とか女神とかって褒めてくれるけど、

本当の天使や女神は私みたいに恵まれた立場には居ないのよ。

自分が一番辛いのに、それでも他の弱いモノに優しく出来る…

そんな、この娘の様な人こそが本当の女神なの」

…俺は心の底から驚き、そして感動していた。

確かに、俺もモンキーもお嬢様の優しさは本物だと知っていたが、少なくとも経済的には一切困る事の無い、

文字通りお嬢様としての優しさが主な成分だと思っていた。

もちろん、そういう環境の中で弱者を思いやれる優しさを持てる事が現実では非常に稀有な事であるのは、世界中の富がごく一部の人間に集中して、

その連中が富を本当の意味で弱者に分け与える事を絶対にしない事を見れば一目瞭然だ。

しかしお嬢様は、その稀有な資質を備えた上で更に底辺に居る人間

の、

僅かしかモノを持たない人々がそれを分け与える事の優しさを理解している。

…ああ、この娘は、まさに聖母<sup>マリア</sup>なのだ…。

「…お嬢様、失礼しました」

バツと頭を下げる俺に「え？」と不思議そうな顔を向けるお嬢様。

俺は、お嬢様の為ならば本当に命も要らないな。

例え世界中がお嬢様の敵となろうとも、俺だけはお嬢様の為に闘う事を誓おう。

ふと壁際に控えているセラを見ると、うんうんと誇らしげに頷いている。

彼女は俺の謝罪の意味を理解した様だ。

「…？ええと、ですから、この娘はその本当の優しさを持っている娘なんです。

だから、彼女がもし承知してくれたら、私の大切な…妹を預けたいのです」

「妹君、ですか」

俺の脳内に三人の娘の顔が現れる。いずれもお嬢様とは腹違いの姉妹だ。

直接会った事の有るのは、末妹のレイラ様だけだが…

「どの方を、ですか？」

俺の質問にお嬢様はふつと、寂しげに微笑んだ。

「…まだ、その妹はこの世に生まれてきていないのです…」

「え！？それでは、奥様がご懐妊なさったのですか？」

美しいが、人を見下している様な表情を浮べている女主人の顔が脳裏に閃く。

「…いいえ、違います。お義母様がお生みになるのでは有りません…」

「…そうですか」

これ以上は俺に伺う権利は無い。

おそろくご主人に新たな愛人でも出来たのだろうか…。

「とりあえず、彼女が目を覚ますまではお預けですね」  
ウインクするお嬢様。

「ベア、貴方も休んで下さい。セラ、貴女もね」

「「いいえ!!」」

俺とセラがハモった。

「…ベア、お先にどうぞ」「いや、セラこそ…」

発言を譲り合う俺達にお嬢様がコロコロと笑う。

「じゃあ、三人で起きてましよう。誰が一番先に眠るか勝負ね!」  
俺とセラは顔を見合わせて苦笑した。

## Final.

間もなくお嬢様は、少女の左手を握り締めたまま愛らしい寝息を立てて眠ってしまった。

セラがお嬢様にタオルケットを掛けて上げている。

セラもかなり眠そうだが、壁際の椅子に腰掛けて欠伸をかみ殺しながら耐えている。

「セラ、キミはもう休め。朝が辛いぞ」

俺の言葉にセラは頭を振る。

「お嬢様がベッドに入ってお眠りにならない限り、私がベッドに入るわけには行きません。」

それより、ベアこそ大丈夫なのですか？ 昨晚、雑魚とはいえあれほどの人数を

叩きのめしているのですから運動量は結構有ったのでは無いですか？」

「…まあ、俺はこういう状況<sup>コト</sup>には慣れているからな」

セラがマジマジと俺の顔を見ている。

「…ベア、もし宜しければ貴方の今までのお仕事や人生について少しでもお話して下さいませんか？ 貴方は、ただのボディガードとは

一線を画していると思えるのです」

俺はセラの目をじっと見詰めた。

そこには興味本位と言うよりも、お嬢様の身を護る人間として同僚の正体を知って置きたい、という気持ちが読み取れた。

「…少しだけならな。俺は実は日本人だ」

「えっ！」

いきなりセラが驚いている。

「ご、ごめんなさい。続けて」



「その前に、俺が日本人じゃおかしいか？」

「…日本人からは、貴方の様な匂い…そうね、言っなれば火薬の匂い、

とても言う危険な匂いは一度も感じた事が無いから…」

遠慮がちに言うセラ。

「なるほど。まあ大多数の日本人はそんな感じだな。

だけど俺はそれが退屈だった、命を掛けて、世界中を廻ってみようと思った。

その為には何が必要か。どんな危険な国や地域に行っても生き残れるだけのスキルが必要だ。

そのスキルとは、戦闘能力、生還能力、技術力に大別される。

そしてそのどれが欠けても生き残る事は難くなる。

だから、それを鍛える為に就職先に軍隊を選んだのさ」

「それで、その匂いが染みたって訳ね」

セラが感心する。

「ああ。だがな、軍隊で身に着けた能力は強靱だが、生き残った人間は

退役してからもその能力を発揮できる職を探しちまう。

そして色んな仕事をして給料を貰う様になったのさ。

で、行き着いたのがこの仕事って訳だ」

「なるほど、ね。でもこのお屋敷に勤めた切っ掛けは何？」

俺はふつと笑い、「それはな…」とセラに説明を始めようとした時のことだ。

「う…ん…」

黒髪の少女が呻きながら目を開けた。

「痛っ！」

声を上げて苦しそうに目を瞬き、焦点を合わせている。

俺とセラが黙り、様子を見てしていると自分の左手を握り締めたまま眠っているお嬢様に気が付いた様だ。

頭を必死で動かしてお嬢様を見て、驚きの色を浮べている。

「ここ、天国、かな？」

俺とセラは嘖き出しそうになったが、黙って我慢した。

その時、お嬢様もふつと目を覚ました。

「気が付いたのね。大丈夫？」

お嬢様が少女の手を握り締めながら問い掛ける。

「……ここは、どこ？あんたは、誰なの？」

少女はかなり戸惑っている。

「ここは私のお家。私は、アイシャ。貴女とお友達になりたいくて、

私の友達に貴女を助け出してくれる様にお願ひしたの」

俺はその言葉に、胸が熱くなるのを感じた。

「……え？どういう事？」

少女は更に戸惑ってしまった様だ。

アイシャ様がこんこんと説明を始めた。

説明を聞いている内に、少女の顔が険しくなってくる。

やはり、少女は傷付いてしまった様だな。

さて、どうなるか。

「つまり、あんたは私を憐れに思って助けてくれたってワケね」

黒い瞳に燃える様な色を見せながら少女が声を絞り出す。

「違うわ、そんな積りじゃないわ」

「助けてくれた事には感謝してる。ありがとう……」

だけど、憐れみなんか欲しくなかった！あんたは恵まれたお嬢様。

あたしは、あんたにとって野良猫みたいなモノなのよね！

あたしはあんたなんか想像も付かない様な生き方をしてきたわ。  
ヴァージン

処女 を失くしたのは九歳の時。

あんた、セックスって知ってる？

あんたみたいなお嬢様はまだ言葉も知らないんじゃないの！？

あたしのクソみたいな人生なんて想像つかないでしょ！」

汚い言葉で罵詈雑言を尽くす少女。

アイシヤ様は悲しそうな顔をして黙っている。

俺もセラも口を出したいのは山々だが、お嬢様が黙っている限り俺もセラも口を出すわけには行かない。

少女はしばらく怒鳴り散らし、苦しくなったのか肩で息をしながら黙った。

その時、突然アイシヤ様の右手が一閃した。

少女の頬がパン！と音を立てる。

俺もセラも、そして少女も余りの事に言葉を失い固まった。

あのアイシヤ様が、少女を引っ叩くとは…！

「ダメでしょ。助けてもらったときにはG r a z i e ありがとうって言わなきゃ」

アイシヤ様はそう言うと、少女をぎゅっと抱き締めた。

「貴女は本当は優しくてか弱い娘。私には解るの・・・」

ルビーの様な深紅の瞳から、ダイアの様な涙を零しながら少女を抱き締めるアイシヤ様。

少女の漆黒の瞳からも涙が零れだす。

「えっ…ふえっ…！うあーーーーん！！」

少女がまるで子供の様に声を上げて泣き出した。

アイシヤ様は更にぎゅっと力を込めて少女を抱き締める。

そして、俺とセラも瞳から涙をポロポロと零してしまっていた。

「ベア、貴方はやっぱり優しい熊さんなのね」

セラが俺を見ながらからかう様に言う。

「…ほっとけ」

俺は一言だけ言い返す。

それ以上言葉を出すと、涙声になってしまいそうだったからだ。

その後、マキと名乗ったその少女は屋敷に引き取られ、アイシヤ様付きのナチュラルメイドになる事を決意してセラの指導の下で基本的な勉強を始めた。

俺とモンキーも護身術や一般常識などの教師として駆り出されてしまったのは計算外だったが：

元々頭は良かったのと、アイシヤ様への崇拜に近い感情を持って必死で頑張り

マキは半年程でかなりの能力を身に付け、ご主人の叔父上マスターが学長をしている

日本の女子学園に特別生徒として入学する事になった。

まあ、マキを取り返しに来た不良仲間を一掃したり、その上のチンケなギャングと一悶着起きて結局俺とモンキーで壊滅させたりと

少々騒がしい事態も起こったが、それはまあ大した事じゃない。

そしてマキを日本へ送り出した後、セラと二人でパブでささやかな祝杯を挙げた。

モンキーはマキとマキの付き添いのメイドをを日本へ送り届ける為に付いて行った。

乾杯の後、「ねえ、あの時の質問の答え、まだ聞いてなかったんだけど？」

とセラに言われた俺は、「ああ、なぜ今の屋敷に勤めたかって事か？」と聞き返す。

ワインを飲みながらこくん、と頷いたセラに俺は答えた。

「俺がこの屋敷の前を通り掛ったとき、窓からアイシヤ様が覗いててな、

俺にウインクをしてくれたんだ。それで、一目惚れしちゃってな」呆れた様に肩を竦めるセラ。

本当の理由は、その内話せるだろうさ。

さあ、明日からまた、アイシャ様の為にガツチリ仕事するか！

「乾杯！」「かんぱーい！」

俺とセラは、俺達の女神<sup>アイシャ</sup>の為にもう一度乾杯をした。

フェルダムト！}EP・00 ガーディアン・オブ・ミューズ 1

}完{

## Final・(後書き)

Ending Image Song : Honesty  
Artist : Billy Joel

Special Thanks to J・J

Presented by Shogo Hazawa

ご愛読ありがとうございました。

フェルダムト！シリーズはまだまだ多くのエピソードが有りますので、随時執筆予定です。

ご期待下さい！

また、ノクターンノベルズにて連載中の、本作と関連が深い拙作「真夏の夜の夢」も合わせてお読み頂ければ幸いです。

但し、「真夏の夜の夢」は18歳未満の方はお読みになるのをご遠慮下さいませ。

それでは、またお会いしましょう。

作者より、全ての読者へ感謝を込めて…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7650c/>

---

フェルダムト！EP.00 G.O.M 1 紅瞳の天使と黒髪の少女

2010年10月10日05時48分発行